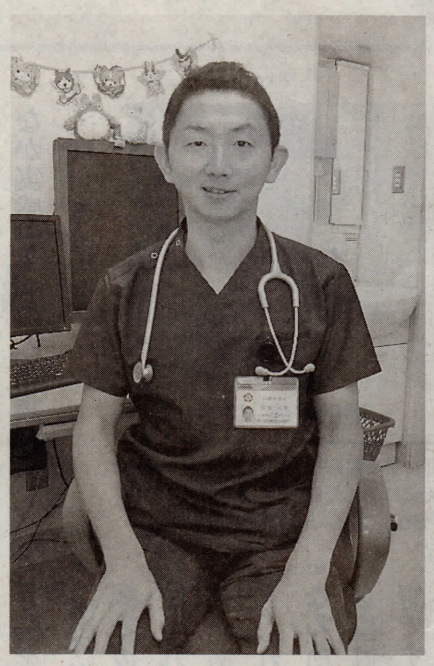
香川の医療最前線 356

県済生会病院小児科部長 岩城拓磨氏



◆いわき・たくま 2002年香川医科大（現香川大医学部）卒。香川大医学部付属病院での研修、内海病院、香川大医学部での勤務を経て、17年4月より現職。日本小児科学会専門医・指導医。日本腎臓学会専門医。富山県出身。40歳。

おねしょ（夜尿症）

怒らず褒めて対応を

アラーム療法、服薬で治療

朝、目を覚ますと布団がぬれているのを感じ、はっとした経験がある人は多いのでは。おねしょ（夜尿症）は成長するに従って解消されていくが、長引くと精神面にマイナスの影響を与えかねないほか、腎臓病などほかの疾病が原因になっていることもあるという。県済生会病院小児科部長の岩城拓磨氏に、保護者の対応法や治療法などについて聞いた。

―なぜ、おねしょをするのか。

3歳くらいまで、おねしょは当たり前に起こる。これ以降も、月数回のペースで続くのは5歳で10％、小学校入学後は5％程度と言われている。原因の大半は、尿をためるぼうこう容量が小さいタイプ。もう一つが、就寝中に脳から多く分泌され、夜間につくる尿の量を減らす「抗利尿ホルモン」の分泌量が不十分なタイプ。これらのタイプが合併している場合もある。

―保護者や家族はどう対応すべきなのか。

多くは成長することで解消される。本人が気にしていないようなら、9歳ぐらいまでは成長を待てば問題ない。（おねしょをしても）怒らない、（おねしょをしなければ）褒めることが重要だ。理不尽に怒られる子どもはとてもつらい思いをし、精神的なダメージを受ける。日中の排尿習慣までも狂わせ、ぼうこうの機能に悪影響を与えることもある。夜間に取る水分量を抑え、（水分がほしくなる）塩分を控えるような生活スタイルをまず整えるべきだ。

―本人が気にしているときは。

心配すべきは、その後の精神面に負の影響を与える可能性があるということ。自信を持てなかったり、友人関係がうまく築けなかったりすることがある。ある統計調査では、幼少期に精神的ダメージを受けた出来事として、おねしょが上位に挙げられている。何より宿泊学習などの課外活動への積極性が失われることが大きな問題である。

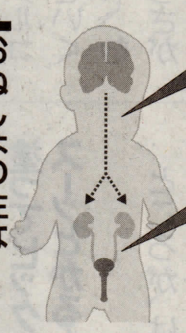
―治療法は。

ぼうこう容量が小さいタイプの場合は寝る前にクリップ状のセンサーを下着に付けて、尿が出れば音が鳴るアラーム療法を行う。アラーム音で目を覚ました後、トイレで残尿をすることを繰り返すことで、ぼうこうの容量が大きくなっていく。ぼうこうの緊張を緩める「抗コリン薬」といった内服薬を併用する場合もある。ホルモン分泌が低下してそうであればホルモンを補充する内服薬か点鼻薬を使用する。

―これらの治療で改善されないこともあるのか。

少数だが、標準的な治療法で効果が得られない場合は単なるおねしょとは異なる場合がある。便秘や先天的な尿路奇形、糖尿病や尿崩症といったホルモンの異常症、腎臓病の要因が考えられ、おねしょが長引いている時は、これら疾患などの可能性も考えることが大切だ。

おねしょの主なメカニズム



抗利尿ホルモンが低下
夜間に腎臓で作られる尿の量が多く、ぼうこう容量を超える

ぼうこうが小さい
作られる尿の量は正常だが、ぼうこうにためきれない

■ 県済生会病院小児科

子どもの健康な発育のため、小児科専門医2人で感染症やアレルギーをはじめとした小児の内科的疾患全般の診療に加え、乳児健診、予防接種も実施。検査機器や入院病床も整え、細やかな医療を提供している。

住　所：高松市多肥上町1331―1
電　話：087（868）1551
http://www.saiseikai―kagawa.jp/